

「樹と語り合う」

NK

長田弘著『人はかつて樹だった』という詩集を読んでいると、森林セラピーで森へ入ったときのこと、いろいろと思い浮かぶ。

ハンモックで揺られながら樹木を見上げると、空と交じわる辺りで、木の葉がささやき合っている。いや、私にささやきかけてくれているように思う。優しいささやきだ。

樹の太い幹にクマの爪痕が残っている。見上げると樹上にクマの座ぶとん。クマと樹木の生き様を見たような気分。動物は植物が作り出した栄養分をもらって生きている。植物に足は早いので走って逃げる訳にもいかず、毒を持ち、棘で武装して身を守る。

森林療法で「アーシング」と言っただけで自然物に触れることで「気」をもらうことがある。樹の根元に腰かけたり、樹木にもたれかかると瞑想すると、樹が語りかけてくる。「疲れているね。風に吹かれて心の淀みを流してはど

うですか」と。逆もある。枯れそうな樹木や松ぼっくりをいっぱいつけて子孫を残そうと必死なマツの木を見つけると樹を抱いて、私の元気をチャージする。そして心の中で唱える、「今のままでいいんだよ。自然なままでいいんだよ」と。

樹木とアーシングをしているとき樹木と語り合っているとき樹木と同化したように感じることもある。それはアニミズムの思想で、万物に霊が宿っていると考えられていた時代から長田弘氏が言うように、「人はかつて樹だった」からではないだろうか。